



TITLE:

# <批評・紹介>梅原郁編 中國近世の 法制と社會

AUTHOR(S):

滋賀, 秀三

---

CITATION:

滋賀, 秀三. <批評・紹介>梅原郁編 中國近世の法制と社會. 東洋史研究  
1994, 52(4): 695-705

ISSUE DATE:

1994-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154464>

RIGHT:

に取り組むのは山本氏が「おわりに」で述べられている様に使用言語の多さという事もあって不可能に近い。よって共同研究の試みとその成果の公表が期待されるのではないか。そうした試みへの一ステップとして本書は一讀の價值があろう。

(註) 深見純生「書評『東南アジア世界の歴史的位相』」『東南ア

シア 歴史と文化』二二 一九九三

一九九二年六月 東京大學出版會  
A五判 xi+三〇六頁 五九七四圓

梅原 郁編

## 中國近世の法制と社會

滋賀秀三

本書は京都大學人文科學研究所において、『慶元條法事類』と『清明集』の輪讀を中心として五年間にわたって研鑽した共同研究班の報告書の一つであるという。客觀的に見るとき、班員が各自思い思いのテーマを一篇の論文にまとめて持ち寄ったものであり、單行書としての企畫性はむしろ希薄である。何かの學術雜誌たとえば『東方學報』の特大別冊といった感じの書物である。よって書評もまた所收一四篇の論文個々の紹介と批評を束ねる形とならざるを得ない。

### 1 竺沙雅章「内律と俗法——中國佛教法制史の一考察」

この論文は「律典の傳譯とその治罰法」「北魏の僧制」「南朝の内律と俗法」「唐の道僧格をめぐって」「唐代佛教教團における治罰」「清規にみえる罰則」の諸節から成り、内律すなわち佛教教團の内部規律と俗法すなわち國家法との關係を、佛教傳來の始めから元代(明清も明示的に除かれているわけではない)まで、通史的に考察したものである。從來の研究が國家の宗教統制の面か、佛教戒律の中國的變容の面に集中するなかで、僧尼の法律上の地位、彼らが内律と俗法の両面からどのような規制を受けていたかという視點から、特にその治罰の實態とその變遷を探らうとする。

「關連史料は多くなく、從來の研究で利用されたものが大部分」

という、その史料の殆どが評者にはなじみの薄いものであつて批評能力のないことを告白しなければならないが、時代を追つて教團内部にも王權が及び、内部の制裁手段として杖刑や罰錢など佛教の「律」のなかには無いものが入れられて行く流れが看取される。唐の道僧格（註35に研究史のインデックス）については制定年代が問い直されている。

ただこの課題には、①僧尼に對する裁判權、②内律・俗法兩面から僧尼に課される規律内容、③制裁手段の三側面がある筈であり、③にだけ偏らず、三本の柱をはっきり立てられたならば、敘述はいつそう分かりやすくなったのではないかと思われる。

2 愛宕 元「唐代の橋梁と渡津の管理法規について——敦煌發見「唐水部式」殘卷を手掛りとして」

水部式殘卷はあまりにも著名な史料でありながら（その研究史は本論文註22に詳しい）そこに現れる橋梁と渡津（渡し船施設）の管理法規には從來殆ど目が向けられたことがない。この論文はそれを初めて正面から取り上げて周回な考察を加え、唐という時代相の一端を浮かび上がらせる上で活用したものである。それが可能となった背景には、唐宋時代の地理についての著者の深い學殖がある。

まず『六典』所載の國家管理の渡津と橋梁に加えて、諸書から探索された州縣管下のそれと、軍事行動に際して臨時に浮き橋を架橋された記録のある地點が一覽表として示される。渡津は地勢上特定の場所に限られるゆえに通行人を檢問する「關」の機能をも持っていた。

ついで水部式中の關連條項が地理を背景として克明に檢討される。渡河施設として、渡津、脚船を連ねた浮き橋（その高度のもの

として鐵索を用いたもの）、木橋、石橋の順に高度となり、それに應じて架設の投資は大となるが管理・維持の勞力は著しく輕減すること、それらが課役體制のもとで賦役によって賄われていた様子が手に取るように分かる。

最後に唐代後半になると主要關津・橋梁の多くが藩鎮の支配下に入り、かつ治安のための往來者の檢問よりも通行稅徵收という財源の機能を重くもつようになることを明らかにする。すべてが面白く、本書の中で一番氣持ち良く讀ませていただいた一篇である。

### 3 辻 正博「唐代流刑考」

唐代の流刑は律令の規定によれば強制移住と強制勞働を組み合わせた刑であり、配所への到着によつて移住の執行が終わり、そこで原則一年の徒役を終わった後は附籍されて配所の住民となる。以後恩赦があつてもすでに配所の住民となつた者をまた郷里に返すという問題は生じない。しかし唐代後半には、恩赦によつて流人を返す例が多くなり、さらには流人は一律に六年經過後に郷里に返す制度となり、流刑は有期追放刑に變質したことが從來から指摘されていた。

この論文はおおまかに言つて、①漢代以來の流刑の沿革（漢代の「遷徙」は邊境での城旦であつたとする新見解を含む）、②律に定める流刑の里數は國都長安からの距離であつて本人の居住地からの距離ではないという議論（その背景に、流に擬律された者はすべて國都に集められてそこで判決が決定し、都から配所へ押送されたという認識がある）、③唐代前半からすでに、恩赦によつて流人を返した例があり臨時の詔や格の規定によつて律令通りでない複雑な制度となつていたこと、および唐代後半における流刑の實態の變遷、

の三部から成る。史料の探索が精緻であつて益するところが大きい  
が、ここでは上記②の論點（八三―八五頁）の検討所見だけを述べ  
ておきたい。

まず流に擬律されたものは覆審のためすべて都に集められたとす  
る所論は到底容認することができない。『唐令拾遺』獄官令二に  
「（上略）若大理寺及諸州斷流以上、若除免官當者、皆連寫案狀申  
省、案覆理盡申奏。若案覆事有不盡、在外者遣使就覆、在京者追就  
刑部、覆以定之」とあり、地方の州で流・死に擬律すると書面を都  
に送り尚書省での覆審と皇帝の裁可によつて決定する。書面審査で  
もし疑義があれば、犯人を都に送るのとは反對に使者が地方に向  
いて面接覆審に當たるといふ制度であつたことが明瞭である。唐代  
の訴訟制度について著者が依據した奥村論文には、書面審査と面接  
審理の區別を立てずに覆審を敘述する點で不備があつたとしなけれ  
ばならない。著者が「隋代でははつきりしている」として挙げる  
『隋書』王伽傳、流囚押送の記事も、それが都での覆審のためであ  
つた證據は何もない。隋の流は唐よりも強制労働の要素が強いので  
あるから、服役中の流囚を勞働力として臨時に移送したと見る方が  
妥當であらう。『宋刑統』所載實應元年敕にいう「省司便配所流  
州」の「配」とは「割り當てる」意味、流何千里と上申されて來た  
ものを具體的に何州に流すと決める意味であつて、身柄を送り出す  
ことではない。そして著者が大きく掲げる獄官令一四がまさしく所  
論を裏切るではないか。「若し符が季末三十日の内に在りて至る者  
は……」とは何時到着するか知れない都からの沙汰を待つ身を念頭  
において始めて理解できる言葉であるし、「江北の人の嶺南に配せ  
らるる者」「劍南に非らざるの人の姚・薊州に配せらるる者」とい

う構文が、著者自身所論へのいささかの留保として註三に引く詔と  
同じ性質のものであることに氣附くべきである。

以上で流の里數は都を起點とするという論據の主要な部分は崩れ  
るが、他面、居住地を起點とすることを積極的に立證することは容  
易ではない。ただ移郷（殺人犯が死刑を免ぜられるとき仇を避けて  
一千里に移す保安處分。これを律以外の法源に現れる移實・移隸な  
どの用語と同類扱いするのは不可）が、被害者眷族からつまりは郷  
里から千里の意味であることは自明であり、賊盜一八條疏に「或先  
相去千里外……不在移郷之限」とあることから知られる。兩者は  
律で「流移」として一括されることが多いことから、流の里數も同  
様であつたと見るのがやはり妥當であらう。日本律が京を起點に  
近・中・遠流を言うのは繼受到際しての改制と考へて別段の無理は  
ない。なお、一〇一頁末行「建德四年」は「建隆四年」の誤植。

#### 4 梅原 郁「唐宋時代の法典編纂——律令格式と敕令格式」

この論文は唐宋法典編纂の通史的考察である。すでに周知の曾我  
部靜雄「宋代の法典類」とほぼ同じ領域・事物を對象とする。大方  
の讀者はそれで了解されるであらうから、要約は省略して直ちに論  
評に入ることとする。

なお評者自身は、中國法典編纂史を貫く一つのメカニズムとし  
て、①基本法典、②皇帝の單行指令（詔、敕などの名で呼ばれる）  
の集積をさまざまの仕方と程度において整理・集約して編成する副  
次法典、③個々の皇帝指令そのものの、という三段のレベル概念を立  
てることが有効だと考えている。法の效力は③②①の順であり、法  
の定着性の低いものほど效力において優先し、高レベルのものの文  
言を変えないまま現實の法を變える。そして高レベルのものはその

背後にあつて基本的・一般的準則を與える機能を持ち續ける。これを頭に入れて置けば個々の場合ごとに同じことを繰返さずに済み、敘述に筋が通る。しかし氣がついて見ると、これを學生への講義で繰返し説いただけで、學界に向かつて改まってまだ發言していない。(もっとも、『ブリタニカ國際百科事典』『中國法』の項目にそれを書いたし、十年以上前に國際研究集會に出したレポートがこの程日の目を見て印刷過程にある“A Basic History of T'ang Legislative Form” (Asia Major, Third series, vol. 5, part 2) にも述べてはあるが。) 今こゝで、頭の中に物を認めながら發言するという苦しい立場にあることをご理解いただきたい。

この論文が大變力のこもった(むしろ力む餘りに思い入れが多過ぎるとも言える) 勞作であることは間違いない。蘇東坡の文集から編敕の條文を搜し出すなど、從來氣附かれなかつた史料をも加えて、編敕から敕令格式への發展が一司一務一路一州その他の特別法令の編纂とも絡み合う複雑な過程であり、北宋を通じてかなり不安定であつたとする敘述、元豐の官制改革と敕令格式という編成構想の發生をバラレルに捉える時代觀などは、この論文の見どころと言ふべきであらう。敕令格式の成立によつて『宋刑統』はもはや法でなくなつたとする曾我部論文の主張を否定するのも(一二九頁以下)、當然のことながら全く正しい。因みに敕令格式の令は刑法的であつたとするのも同論文の大きな誤解であるが、これもこの論文の敘述自體がその駁正となつてゐる。

疑問として、唐の格を「行政と關係し」たもの(そこに含まれる刑罰規定は行政法規の「罰則」と性格規定し、その意味で格は律(また律令)とは「系列が違ふ」「本質的ともいふべき差異」があ

るとする見方、そして一層鮮明に宋代敕令格式の敕と律(刑統)の關係をも同様に見ようとする線が一本通つてゐること(一二四頁、一三一―一三三頁、一六〇頁、一六四頁)、これに對しては異議を申し立てたい。敦煌出土散頒刑部格を一瞥すれば、それが律の規定は動かさずに實質的に刑法を細目化し刑罰を輕重すること、大清律例の律と條例の關係に酷似していることが見て取れよう。他面、仁井田陞によつて開元戸部格と考證された諸條文(同氏「中國法制史研究・法と道德」二八四頁以下)を見ればそれらが令との間で同様の關係にあることが知られる。よつて格とは前述のメカニズムにおける(律令を基本法典とする)副次法典であると性格規定するのが最も妥當であらう。また『慶元條法事類』のうちに「諸竊盜得財杖六十、四伯文杖七十、四伯文加壹等……貳拾貳貳本州」(古典研究會本八八頁上段、その他に複出)なる賊盜敕など、自然犯に對する律の規定を修正する敕の規定が多數現れる。「殺人傷害や強盜竊盜などの犯罪にあつて」も律がそのまま行われていたのではない。律と敕は「對象が違つて」いたとは決して言えない。やはり基本法典と副次法典の關係と言う外はない。

唐の格式をめぐるのは、拙論「漢唐間の法典についての二三の考證」(『東方學』一七輯)第三節を参照していただきたかつた。そうすれば少なくとも『舊唐書』刑法志を『六典』投入部分に氣附かずに引用することは避けられたであらう(一二三頁)。「宋刑統」の「准刑部格、敕……」はこのように讀むのであり、「格敕」と連ねて論ずるのは正しくない(一二七頁。仁井田前掲二九〇頁参照)。太平興國編敕を柴成務上言中の一語を採つて三十卷と見ようとするのは餘りにも強引ではないか(一二七頁)。同じ「宋會要」が地の文で

は十五卷とし、同じ成務の上言でも『長編』の引用ではやはり十五卷となっている。律疏三十巻を意識した巻数なのだと論ずるのは荒唐無稽と言わざるを得ない。その他個々の疑問を言い出せばきりがない。もし評者自身はこの対象領域をどう見ているのかと問われるならば、今のところ簡単ではあるが前記英文論考を見ていただきたい。

誤植とおぼしきものも目に附く。二二〇頁末二行「貞觀」↓「武德」、「二八頁二行「使をして」↓「人をして」、「一三〇頁九行「金科正條」↓「金科正義」、「一四〇頁末二行「瑞匹」↓「端匹」、一六三頁七行「職制律」↓「職制令」など。

##### 5 宮澤知之「唐宋時代における銅銭の私鑄」

主として唐宋五代宋初に私鑄の惡銭が流通せざるを得なかった事情と、宋によつてそれがほぼ克服された過程が論ぜられる。貨幣史に不案内な評者には、從來の學界状況とこの論文の關係・位置附けがよく分からないし、論文自體にもそれが述べられていない。ただ、鑄造の採算性という視點から問題を執拗に追及しているのがこの論文の獨自性であらうとの見當はつく。

だがそこで、當時の人々は、(鑄造された總額ではなく)鑄造された總額から鑄造原價を差し引いた「淨利」と、鑄造原價とを比較して採算率を考え、前者が後者を上回ったときに採算に合うと意識していた、という不思議なテーゼが一貫している。これには好奇心をそられて、挙げられた史料根據を徹底的に検討した。紙幅がないので委細は省略して結論だけを言えば、このテーゼは成り立たない。史料からの読み取り方が到るところで正されなければならぬ。ほんの一例を示せば、「所鑄新錢纔二十萬緡、而用本錢十二萬

緡、吏卒之費又二十三萬緡、得不償費」(註72)の「得は費を償わず」(新錢二〇萬緡を鑄るのに二二萬プラス二三萬緡を費やしたのでは引き合わない)のところに「費を償わざるを得んや」(一九三頁末四行)という、あり得ない読みを與える無理が犯されている。一九〇頁の採算率表も數値のとり方に不整合があつて意味を成さないものとなっている。

この骨を抜き取ったあと如何なる數益を汲むべきか不案内な評者にはよく分からない。一八八頁七行「全國」は「金國」の誤植か。一八九頁一行、「慶元條法事類」の引き方はどちらも「雜敕」でなく「隨敕申明」としなければならない。

##### 6 齋藤忠和「北宋の軍法について」

同著者の既刊「宋代の階級法に關する一試論」「武經總要」に見える宋代軍法の條文について二篇を承けて、いわゆる「軍法」全體について包括的に考察を加えたものである。

「軍法」「軍律」の語が史書に現れ、軍人・軍事に適用される特別刑法を意味することを明らかにした上で、『武經總要』『罰條』七二條(訓讀し番號を打つ)、『太白陰經』から二〇條、『通典』に引く後漢の「步戰例」から一四條、『宋會要』景德元年の詔から二〇條(以上原文のまま)を、軍法の内容資料として掲げる。ついで史書から軍法によつて處斷された實例一二を拾ひ、『武經總要』との對應關係を調べ、また「常法」つまり律との對應關係を一七項目にわたつて論ずる。文中に、軍法とは「軍中での將軍の專決基準を示したもの」(二三三頁。また二三九頁)と言っているのでないかという意味深い言葉がさりげなく出て來るが、この邊りがさらに詰めて研究すべき重要課題でないかと思われる。なお二三三頁一〇行

「擅興九」は「擅興八」の誤植であらう。

7 長井千秋「南宋軍兵の給與——給與額と給與方式を中心に」

宋の兵制をくくおまかに言えば、北宋では實戰的國防軍たる禁軍と地域の治安維持と雜役に當たる廂軍・鄉兵があり、南宋では禁軍・廂軍はともに州の財源で賄われる地域雜役軍となり、都統司に統括される大軍が國防を擔うことになる。

この論文は、將校下士官の處遇には觸れずもっぱら諸軍の兵卒への給與額と南宋大軍の給與方式を詳論する。①北宋には兵士一人當たり年間で禁軍五〇貫、廂軍三〇貫という目安があったとされるが、それは本来ならば「五〇(三〇)貫石匹兩」と表記すべきいわずゆる複合單位である可能性が高いこと、②目安となる數値の無い南宋について散見する數値史料を博搜して可能な限りの概觀を提供すること(大軍については本俸(熟券)と出戌手當で(生券)を併せ考える)、③鎮江都統司とその兵站局たる淮東總領所のケースについて支給に必要な文書の動きと、家族と出戌中の本人とに分けての支給などを論じ、「借請」(給與の前借り支給)、「分擘口券」(家族分をさいて本人に回す)などの語義を明らかにすることが、およその論旨である。

これも評者にとっては不案内な領域であるが、財政史・軍制史への努多き基礎作業の一つであることが尊いのだと思う。

8 佐立治人「清明集」の「法意」と「人情」——訴訟當事者による法律解釋の痕跡」

この論文は評者滋賀が清代諸史料から描き出したところの、國法・天理・人情(三者は區別はされても相剋せず實際の働きの上では融合して情理(常識的衡平感覺)を形成する)を基準として裁定

し、威壓を伴った説得によって當事者の納得を勝ち取るという訴訟像を強烈に意識しながら、南宋「清明集」の世界においてはそれと著しく(著者の考えでは原理的に)異なった、法律に依據する裁判という訴訟理念が支配的であることを論じた明晰かつ鋭利な大作である。

宮崎市定氏の論じた民間訟學の流行から書き起こし、人が法律を教習したのは裁判に勝つためであり、それは當時の民事訴訟が法律によって黑白を着けるものであったからに外ならないという見通しがまず立てられる。ついで『清明集』からいくつかの言葉を引き「當時の裁判官は、法律に依據して裁定しなければ當事者の納得が得られない、という意識」「和解と、法律に依據する裁判とを明確に區別する意識」を共通して持っていたことを立證する。またその亞系として、裁判は契約の眞偽によるべきで、一方當事者の貧弱への同情や過去の惡行への懲戒の念などを交えてはならないとする意識の存在を指摘する。(第一、二節)

しかし『清明集』の裁判官も法律と並んでやはり「人情」をも口にする。よって『清明集』の中で判斷基準として「人情」を明言しまたは「法意に非ざるも」と言われている事例のすべて計三二例を拾い出す。それに先立って、同じく國法・天理・人情を口にしながら人情には否定的な意味を持たせる宋人の言葉(當時の意識がそれ一色というわけではないが)を擧げる(三〇五頁)。「これは興味深い。理氣哲學との通底が感ぜられる。」さてこの三二例を検討すると、そこで明らかに法律が曲げられているのは七例だけだという。つまり多くは「法意からしても人情からしても」という言い方になる。法律は情理を表現したもの、人情は法律の中にすでに含ま

れているとする、清代と共通する言葉も出てくる。それを押えた上で「けれども、清代とは逆に」南宋では、人情を含んだものであればこそその「法律に依據して判決を下す」べきだとされたのであって、清代のように「法律を飛び越えて人情だけが直接判断基準になるわけでは決してなかった」と論ずる。(第三節)「この點、如何なる實態を指して『飛び越え』というのかがそもそも問題であり、清代をそして清代だけをそう決めつけてよいか大いに抵抗を感ずるところである。」

裁判が法律に依據するものであったとすれば、當事者は自己に有利に法を援用する術に走ることになる。これと民間訟學の流行は辻褄が合う。宋代に「人民は法を知つてはならぬ」という思想が行われたとする説は否定されなければならない。事實、『清明集』には、當事者が法律を知らないことへの非難や、法律を理解していることへの期待の言葉がいくつも出てくる。當事者が法律を援用して争っている實例、官が當事者の法律解釋を否定して正しい解釋を示している實例も拾うことができる。論じ、法律の巧みな援用法「舞文」を教える訟師も現れていることにも觸れる。(第四節)

以上の「結び」として、『清明集』の民事裁判は、法律に依據して當事者の主張の是非を二者擇一的に判定する裁判であり、決して情理に基づく教諭的調停ではなかったと斷じ、宋代は清代よりも民事的な法律條文を遙かに豊富に持つていたという時代差は滋質のすでに指摘するところであるが、量的な違いでなく、兩時代の間に「質的な變化が起こったと説明せざるを得ないのではあるまいか」と示唆する。そして最後にまた立ちかえて、「人情」は前掲三三二例において必ず「法意」とともに現れる。それは「制定法を媒

介としてのみ發見され、制定法よりも後に存在するものであった。」「人情」とは裁判官が當事者の法律解釋を斥けて自己の解釋を正當化する據り所であり、判語にそれが現れること自體が當事者が法律解釋を争つた最大の痕跡なのかも知れないと論ずる。「この最後の議論には待ったを掛けたい。ここで論調が俄に飛躍的となるし、「人情」が必ず「法意」とともに現れる、という出發點が事實に相違する。著者の三三二例からは漏れているが、「只得據供證、酌人情、作此結絕案」(『清明集』三〇七頁)、當事者の主張でなく所業を「何不近人情之甚邪」と叱る(同三二頁)、「庶得兩盡人情、可無詞說」(同三五二頁)など、そうでない例を拾うことができる。」

以上に紹介した論旨は、留保は附けたが總體として、よく事物を見抜く正確な史料の読み(ただ三三二―三三三頁胡石壁の文の読みは疑問だが)の上に立つて大きな説得力をもつ。これに啓發されて私としての對應は異日に期するが、見通しだけを言えば、宋と清の時代差は確かに大きく、その間の歴史過程を跡附けることが今後の學界の重要課題とならなければならない。しかしアゴンの訴訟でなく父母官型訴訟という體質は宋も清も變わらない。著者の言葉にいくつも「法律に依據して裁定しなければ當事者の納得が得られない」というように、宋でもやはり納得なのである。法(Recht)を争う訴訟ならば、手續的手段を使い果たして確定した法(判決)は納得と否に關わらず妥當する筈であるが、中國ではそうでなかった。宋代に法律多しといえども皆な實體法であつて手續法が無い。終審裁判所もない。手續的手段はどこまで行つても使い果たされないといすれば、一件は(諦めを含めての)納得によつて終わる外はな



い。この邊りに傳統中國法の不變の體質がある。その體質の中でお願者な歴史的變遷があることが面白いのだと思うのである。

#### 9 徳永洋介「南宋時代の紛争と裁判——主佃關係の現場から」

この論文の主眼は、強制執行の側面に焦點を置いて南宋の民事訴訟の態様を描き出すことにある。黄震『黄氏日抄』卷七〇く八五を史料として、縣尉配下の弓手が出動して身柄の拘留虐待を含む過酷な手段によって佃租の納付を督促するあり様（黄震はそれを非法として弊害の除去を繰返し上申する）、その背後に豪族の幹人と官衙の結託があることを描き出すことを主軸とし、『宋會要』等當然の史料のほか特に『作邑自箴』『州縣提綱』『清明集』など官箴・判語を活用して論を進める。判決の確定という觀念のない説得型の裁判において、判決手續と執行手續は分離せず、執行もまたそこばくの間接強制を伴いながらの説得でしかあり得ない。その不備を埋めて捕盜を任とする筈の弓手が私債の取立てに暴力を振うという非法が、弊害とされながらも起こらざるを得ないという矛盾があった、というのがおよその論旨である。著者の關心は廣く論及は多岐に渉るが、廣いが故にまた擴散して掴みにくいので、一應このように理解しておく。

從來深く論ぜられなかった執行の側面に光りを當てたことは新鮮であり、力作であることは確かである。佐立論文と對照的な側面を扱ったこの論文が、一書の中に收められた意義は大きい。しかしまたこの論文は晦澁なること本書の中で随一でないかと思われる。第一に史料の讀みが正確でないために讀者を當惑させる。訓讀體で引かれた史料がしばしば非常に解かりにくいので原文に當たつて見ると、多くは何かの缺陷があるためである。三四三頁末六行「かくの

如く」(如是)は「もしこれ」、三六七頁二行「利息倍を過ぐるや」は「||過ぐるも」でなければならず、ここに詳説できないが三四六頁の『州縣提綱』、三七〇頁の第二引用なども随分ひどい。三四八頁三行「獄官は夜獄を點ぶるの時」の下には「或は呻吟の聲有るを聞けば」一句を脱している。引用でなく本文三七五頁末五行「八九割まで欠租を收穫の横領と言いかえ」とあるのは、史料原文では「而西蘭人命、事因索租者十八九」であり意味がすり變わっている。かような不正確さを調べ上げたならなお無數に出て来るだろうと思われる。

第二に掲出史料とそれによって裏附けようとする論旨とがしばしば緊密に噛み合っていない(所論と本質的關連のない雜令へ務限の法)を執拗に引き合いに出すのもその一つ。そして第三に地の文章そのものが奔騰する想念を整理不十分のまま投げつけた感があり、ことごとく疑問を起こさせる。大作に對して申し譯ないけれども、著者の立てる命題の一つひとつには附き合い切れないことを告白せざるを得ない。

#### 10 森田憲司「至元三十一年崇奉儒學聖旨碑——石刻・『廟學典禮』・『元典章』」

題名の聖旨は、碑刻されて残り拓本または著錄を通じて利用可能なもの十一點のほか、文獻としては『廟學典禮』『通制條格』『元典章』に收録されて傳わる。この論文はそれらの綿密な對校を主軸とした文書學的な論考であり、石刻資料の魅力に取りつかれた人の執念が感じとられる。だが一つの疑問があるのでそれを述べたい。

東平府學の碑に「都省今出榜省諭、欽以施行、合行榜示者」とあるのを「都省、今ま榜を出して省諭するに、『欽みて以て施行し、

合さに勝示を行え」とあり（四一七～八頁）とは讀めないのではない。こゝで都省独自の命令内容は「欽以施行」（もつと長かった原文の節略かも知れないが）だけであり、「合行勝示者」は「勝」なる文書を締め括る定型の結尾語と解さなくてはなるまい。奈國公廟の碑文二件にそれぞれ「都省合行出榜曉諭、（中略）須議榜者」「都省合行出榜曉諭、（中略）須至榜者」（四二三頁）とあるのも、ここに中略した部分がそれぞれの「榜」の正文つまり命令内容であり、「須議榜者」「須至榜者」は結尾の常套語である。さきの「合行勝示者」もこれと同様に解さなくてはなるまい。そして三者ともに最後に見える「右榜曉諭諸人通知」等の文字は立碑者の立場から加えた言葉としか考えられない。この論文において、廟學の聖旨碑は上部からの指示によって立てられたことが強調され、それが殆ど唯一歴史認識に結びつく提言となっているのであるが（四二六～七頁）、その根拠が崩れる。寺觀と同様に廟學も自己の意志と資金で碑を立てて特權を誇示したと見る方が歴史像としてもおだやかに思われる。

固い論文だけに誤植があつて欲しくないが、四〇九頁一行末字「擢」は「懼」の誤と分かる。四二二頁末行と次頁八行の「欽之」は四二五頁の原文では「欽此」となっている。どちらが眞なのか。恐らく後者が眞とすれば、四一七頁一行、四一八頁四行、四二〇頁八行の「欽之」はこれでよいのかお調べいただきたい。

# 11 夫馬 進「明清時代の訟師と訴訟制度」

中國において名譽あるプロフェッションとしての辯護士は存在せず、訴訟當事者に手をかすことを業とする者は、訴訟を唆す訟師として常に取締りの対象とされた。この論文は、訟師が彈壓されなが

らも數を増し活動を盛んに行つたのは民衆がそれを必要としたからに外ならないという、從來忘れられていた視角から問題を掘り下げ、清代訴訟制度を一般の人々の立場から、いわば下から捉え直そうとする。

その前提としてまず、諸史料から訴訟件數に觸れた言葉の端々を拾つて、意想外に訴訟が多かつた事實を明らかにし、訴訟の手續きと進行過程のあらましを述べる。訴訟は萬人に開かれており多くの者が利用したこと、「文書主義が徹底していた」こと（巧みな訴狀でなければ勝てないし受理さえされないかも知れない）、胥吏・衙役への支拂いその他すべて受益者負擔であり賄賂が必要であつたことの三點が重要であるとする。

それに對應して訟師の職務は訴狀の代作と胥吏・衙役との交渉の両面があり、それぞれ非難の口調で「教唆詞訟」「包攬詞訟」と言われたのがこれである。どちらの面においても一般人は訟師なしでは困つたのであり、有能な訟師はおのずから名を擧げた自己宣傳にも努めたさまが描き出される。

さらに訟師の供給源は主として科擧に榮達を得られない生員たちにあり、規格の中で筆を競う點において八股文と刀筆の技倆は共通していたことなど、訟師と科擧制度との深い關わりを論じ、同じく科擧制度の落し子である幕友とも起源的に同根であることを示唆する。

「結語」でこのような實態をどう見るべきかを論ずる。いまひとつ纏め切つていない感があつて要約しにくい、健全な訟師像とそれは禁壓すべきでないことを述べた嘉慶の名幕友王有孚の言葉を引いて結ぶのは印象的である。

官箴、公牘、官歴記談、省例、地方志、さらには清末の新聞『申報』など驚くほど広い範囲からよく利いた史料が選ばれ、それが明快な構文に綴られて、學界に與えるインパクトは頗る大きい。他面、それだけにまた讀者は、鋭利な筆鋒によって事の一面が不當に強調されている嫌いはないかという或種の意地悪さをもってこの論文に接する必要があるように思われる。

一例を挙げれば、訟師の「包攬詞訟」が繁盛していたことは事實であるとしても、逆に、訟師なしでは一般人はどうやって「海千山千の承行胥吏や擔當差役に渡りをつけ」「賭路」「手数料」の交渉をすることができたのか（四六五頁）と持つて行くのは筆先の仕業であつて、客觀的には飛躍でないかと警戒すべきである（そこでの間接的な裏付けが時代の違ひ『清明集』の片言だけであることも氣に掛かる）。むしろ清代中國の日常生活において賄賂的なものは必須の潤滑油であり、人々の場合に應じて有効適切適額の手を打つ知恵を生活自體の中で訓練されていた筈である。役所との對應もその一環であり、胥吏・衙役の陋規の相場などロコミで人々に傳わるものだったと見るのも無理な歴史像ではない。職業的公證人なしで規格に合つた契約文書が無數に作られていたことから見ても、民衆の實用文能力を不當に低く想定してはならない。計算上家族の誰かが「一生のうちに一度や二度は必ず訴訟に關係した」（四四二頁）ことになる社會において、訴狀のスタイルにも人々は或る程度馴染んでいたであらう。健訟の地方では肉體労働者でも一氣に訴狀を書くという記事も出て来る（註53。これを訟師遍在のくだりで持ち出すのは（四六九頁）當たらない）。そして代書（その機能はこの論文は不當に低く扱つてはいはすまいか）もあった。名のある訟師

を利用する者も多かったが訟師なしでは動かないシステムであつたのでもない。むしろ訟師概念の外延は曖昧であり、その裾野は自家のために訟師性を發揮する民衆そのものであつたというのが眞相なのかも知れない。

文書主義の「徹底」と何故ことさらに言う必要があるのか、またそれは妥當か。詞狀が一度「不准」とされるとそれで終わりという言い方（四四四頁、四四七頁）は、檔案に見る實態（一度不准とされても多少の潤色をして殆ど同じ内容のものをまた出して来る。律の「一告一訴」規定は具文と化していた）と遠いではないか、などの疑問もあるが論ずる紙幅がない。ともかくも痛快な作であり法制史研究者必讀の文獻である。

## 12 谷口規矩雄「明末の金花銀について」

金花銀とは折糧銀の一種で正統年間以降年額百萬兩が内承運庫に入れられ武官の俸給と内廷費に當てられていたものらしいと理解するだけで、評者には直接的な知識がない。

この論文は萬曆四十七年（サルフ敗戦の翌年）、戸部廣東司主事鹿善繼が尙書李汝華の同意を得て、金花銀の一部（廣東省納付分）を皇帝の裁可なしに遼東へ軍餉として送つてしまつた事件の経緯を、萬曆二〇年頃から現れていた宮廷費の節減を求める財務官僚と皇帝側（その主要スタッフは宦官であらう）との對立をも絡めて追跡する。官僚側に鹿善繼擁護論が多く堂々の論陣が張られていることが興味を引く。そこには東林・非東林の黨派對立が見られないという。法制史の立場からは官僚が上奏のなかで『會典』を引いて論據としていることが印象に残る。

## 13 濱島敦俊「近世江南李王考」

この論文は、前近代中國の基層社會で民衆がどのような信仰を有していたのか、それが基層社會の共同關係とどのようにに連關していたのかというテーマを追う著者年來の旺盛な研究の一つの所産であり、常熟・長興の地方神（地方史料で「土神」という。土地神・土地公とは異なる）について考察する。

道光二六年常熟に起こった抗租暴動において土神信仰が決起を促す作用を持ち、鎮壓後官憲は總管・周神・猛將・李王なる四體の神像を捕縛し、處罰として城隍廟で晒し者にした上でもとの廟に返したという面白い事件から書き起こし、前三者の素性の概略を述べ、最後の李王について節を改めて詳論する。いずれも過去の人物が祭られて靈異を現すものであるが、それぞれに子孫と稱する巫師がいる。むしろ巫師が祖先に假託して神を創造したと見るべきことが指摘される。

李王については著者が前稿「中國村廟雜考」で述べた見解は誤りであったとして訂正する（五一三頁）。李王は元來は長興の地方神（それもそもそもは安化鄉童肚里の土地公であったと推定される）であったのが常熟に移り、元代に海運基地であった當地において航海の守護神となった。他面、本家の長興においては海運などとは無縁な「鄉曲保全」の神として祭られている、というのが粗筋である。書籍史料のほか自身の現地調査と現地篤學の士のフォークロア採集までを加えた論述の魅力をここには再現できないことが残念である。準備中という總括的な專著の出版が待たれる。

#### 14 中村正人「清律誤殺初考」

誤殺とは、典型的には、敵對者と格闘中に近傍にいた第三者に誤って傷害を加えこれを死に致すことを言い、人命事犯の一態様とし

て唐律以降歷代の刑法に現れる。ただし格闘による外、殺人の意志をもって攻撃（律の言葉では豫謀の有無によって謀殺・故殺）して誤って第三者を殺す場合もあり、近傍の第三者に加害する場合（現代刑法學でいう「方法の錯誤」）の外、狙った人物が實は人違いであった場合（客體の錯誤）があり、それらすべてが關連してかなり複雑な問題となる。從來、現代刑法學にいう「錯誤」を中國法はどうか扱っていたかという視點から法制史家のみならず刑法學者によっても注目され議論されてきたものである。

この論文は唐律以來の歴史の概觀と清代の律と條例および判例の精査の上に立つて、誤殺處罰の實態を克明に追及し、その實態に照らして從來の諸説に不當・不足の點があることを明かにし、誤殺律を刑法總論上の理論である錯誤論の見地から解こうとすることが土臺無理であり、むしろ各論的に、人命事犯の一態様として誤殺を捉え直す必要があるという結論を導き出す。中國の舊律は犯罪が成立するか否かよりも、反社會的行爲にどの程度の刑罰を科するのが妥當かを一番の關心事として組み立てられたシステムであり、その中の誤殺概念であるがゆえに、それが必然なのだという。そしてその實質的な捉え直しはなお將來に期されるゆえに、論文は「初考」と題されている。史料の探索・解讀・意味附けの面でも、刑法學の理論への理解の面でも、ともに正確・精緻であって諸説の紛糾を斷ち切ったきれいな論文である。本書の書評のために與えられた紙数をすでに大幅に超過しているし、この論文は『法制史研究』43に必ず取り上げられるであろうからここでは簡略に止めておく。

一九九三年三月 京都大學人文科學研究所

B5判 五八四頁